
巢無き隼と光無き少女

つくも

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

巢無き隼と光無き少女

【Nコード】

N7214V

【作者名】

つくも

【あらすじ】

隼総が天河原で出会ったのは目の見えない少女。居場所が欲しい隼総、誰かに必要とされたい少女。二人の思いが交差する物語。

注意書きとプロローグ（前書き）

目の見えない子が生徒としてしている理由は後に判明します。
また、恋愛物になる予定ですが第一印象は互いに最悪です。
のんびり更新なので気長にお待ちを

注意書きとプロローグ

この物語はオリジナルキャラや捏造があります。

また、フィフスセクターや化身使いについては作者の見解で話をすすめています。

始まりはGOの世界観から1年前の話になります。

次のページはプロローグになります。

居場所

それは幼い頃から夢見たもの

家族に捨てられて、フィフスセクターに従うしかない日々

口や態度では従ってるが、心では忠誠心なんて持っちゃいない

ただ、居場所が欲しかった

「俺」を受け入れて、認めてくれる場所が

そんな人が

欲しいと俺は何年も思い続けていた

だから誰か

俺に居場所をください

注意書きとプロローグ（後書き）

閲覧ありがとうございます。

第1話 出会い(前書き)

入学した隼総と少女の出会い。

第1話 出会い

春、桜が舞い真新しい制服に身を包んだ新入生達がここ天河原中の校門をくぐり抜けていく。

そんな新入生の中に、一人じつと学校を見渡す少年がいた。

紫色の肩につきそうな髪に唇に口紅を塗り、パツと見は少女と思わしき少年の名前は隼総英聖。

彼は新入生であり、サッカー管理組織「フイフスセクター」から送り込まれたシードである。

サッカーに公平と平等を求めるフイフスセクターは、幾つもの学校にシードと呼ばれる化身使いを派遣する。

化身とは、己の氣の力が具現化したものでサッカー選手の中でも相応な実力を持つ者にしか扱えないのである。

隼総もその化身使いの一人で、天河原中に派遣されフイフスセクターの指示を守るよう監視する役目を担う事になった。

学校をしばらく見た後、隼総は深いため息をついた。

「めんどくせ……」

忠誠を誓ってはいるものの、隼総にとってフィフスセクターは仮初めの居場所ではない。

自分の意志でいるわけではなく、フィフスセクター側も自分だから必要だとは思っていない。

そんな事を考えながら、隼総は校門をくぐった。

入学式が終わり、数日たったある日。

隼総はサッカー部にいた。

今日からサッカー部員として、シードとしてサッカー部に籍をおく事になる。

他の1年達と一緒にいるつもりはなかったのにと、隼総は隣にいる茶髪の少年を睨みつけた。

隣にいる少年はニコニコしながら周りを見ていた。

少女のように可憐な容姿でクセのある茶髪のショートヘア、頬には絆創膏の少年の名前は輝月^{まきつき}聖夜^{せいや}。

隼総と同じクラスになり、同じサッカー部に入る事になった少年だ。

人懐っこい彼は隼総を気に入り、一緒に行こうと無理矢理隼総を連れてきたのだった。

「（なんでこんな奴に捕まっちゃったんだ俺……）」

本日2回目のため息。

しばらくすると先輩達が現れ自己紹介をする事になった。

「喜多一番、ポジションはFWです。よろしくお願いします！」

最初に自己紹介をしたのは喜多と言う橙色の髪を後ろで結んだヘアバンドが印象的な少年だった。

喜多が自己紹介をすると、隣にいた奴もまた自己紹介をしていく。

一番左が喜多で、隼総が一番右だ。

つまり自分が一番最後になる。

そう考えた隼総は、皆の自己紹介を聞きながら少し上の空でいた。

聖夜の自己紹介が終わったのを聞き、隼総は自分の番かと一歩前へ出た。

「隼総英聖。ポジションはMF…それから、シードだ」

シードと聞いた瞬間、周りがざわついたが隼総は気にせず続けた。

「フィフスセクターに逆らうような馬鹿はいないだろうがま、せいぜい限られた自由を楽しめよ」

挑発的な態度で言えばあからさまに嫌そうな顔をする者が何人かいたが、どうせ逆らいやしないと隼総は不敵な笑みを浮かべた。

その様子に見かねた部長が声をあげる。

「つ、次は新しく入ったマネージャーだ。自己紹介頼む」

「はっ、はひっ!」

部長の言葉に反射的に返事をした少女がいた。

その少女は噛んでしまった事が恥ずかしかったのか困ったようにキョロキョロしていた。

「うわぁ……大丈夫かなぁ」

隼総の隣にいた聖夜が心配するように少女を見る。

少女はふわふわとした茶髪をツインテールにしており、聖夜によく似た可憐な顔立ちをしていた。
その少女と聖夜を交互に見た後、隼総は聖夜に尋ねる。

「おい、あいつ」

「お姉ちゃんだよ、双子の」

聖夜が言い終わるほんの少し前に少女は頭を勢いよく下げて自己紹介をした。

「きつきひめか輝月姫華です！一生懸命頑張ります！よろしくお願いします！」

第2話 苛立ち（前書き）

天河原の監督の名前捏造。

第2話 苛立ち

マネージャー、聖夜の姉である姫華の自己紹介が終わる先輩方の自己紹介が終わると練習が始まった。

練習の最中、隼総はマネージャー：姫華の方に視線を向ける。
理由は気になるからではなく

苛立ちから。

姫華は一生懸命やると言う言葉通り一生懸命やっているのだがものすごくトロかった。

おまけにすぐ謝る性格だった。

隼総の性格上、その性格はイライラ以外の何ものでもなく練習に身がはいらなかった。

「……………うっぜえ」

「どうしたんだ」

ふと近くにいた喜多が隼総に尋ねる。
隼総は喜多の言葉に姫華を指差す。

「あいつだよ、あいつ。トロクせえしすぐ謝るしすっげえ苛つく」

「ああ、輝月さんか。だが彼女は」

喜多の言葉を聞く前に隼総は姫華の方に向かっていく。

「おい」

「は、はいつ。なんですか…?」

「お前、うざい。見ててイライラすんだよ、やる気あんのか?」

姫華の元に来た隼総は思った事を彼女に告げる。
苛立った口調を聞いて姫華は体を強ばらせる。

「あ……えと……ごめんなさ」

「だから、そのすぐ謝るのが苛つくんだよ！謝るくらいなら何もすんな！」

また謝罪の言葉を聞いて更に苛ついた隼総は姫華を怒鳴りつける。その言葉に驚いた姫華は今にも泣きそうな顔だ。

周りは止めるに止める事が出来なかった時、一人の人物が声をあげる。

「こら、女の子泣かしちゃ駄目でしょ」

隼総を止めたのはサッカー部の監督である女性、よいほしおりひめ宵星織姫である。

あまり迫力のない怒り顔を浮かべながら、皆に練習を続けるよう言った後隼総と姫華をベンチに座らせた。

隼総は面白くなさそうに宵星を見ていた。

「なんで俺も…」

「シードである前に、貴方はウチの学校の生徒よ。サッカー以外でも黙認されるとは思っちゃ駄目よ？」

そう言いながらニコニコと隼総を見る宵星。
その様子を見て隼総は深いため息をつく。

隣の姫華は大人しく話を聞いているとはいえ宵星を見てはいなかった。

それを見た隼総が不思議そうにしていると宵星は口を開いた。

「輝月さんはね、目が見えないの」

「は？」

「うちの学校が、今年から目や耳が不自由な子も普通の学校生活を送れるようにって福祉の資格がある人を先生として呼んでその達の日常生活をサポートする制度を作ったの。輝月さんはその第1号で入学したのよ」

宵星の話聞いた後、隼総は改めて姫華を見た。
もたついてた理由がなんとなくわかったが目が見えないからという理由で多目に見るつもりは隼総にはなかった。

「おい、輝月姉」

「あね…？」

「輝月の姉貴だろ、お前」

「あ、はい。お姉さんです」

さっき自分を怒鳴った相手なのにも関わらず姫華は普通に返事をした。

声で怒ってないと判断したのだろう。

「俺はお前が目見えなくても関係ねえ、特別扱いだつてしねえ。だからってのを甘えにする奴は嫌いだ」

「じゃあ、普通の人みたいに接してくれるんですか？」

隼総の言葉にどこか嬉しそうな姫華。

どうやら目が見えない事で態度を変えられるのは苦手らしい。

それを見た宵星は何かを思いついたようで隼総をみる。

「そうだ、今ボランティアで輝月さんのサポートしてくれる人を探してるの。今は喜多くん一人なんだけど、隼総くんにもやってもらうわね」

「はあ？」

隼総が驚いている間に宵星はよろしくと隼総に伝え選手の指導に向かった。

残された隼総は何度目かわからないため息をついた。

第3話 反抗（前書き）

ボランティアに任命された隼総だが、納得していないまま次の日になつた

第3話 反抗

「お早う、隼総」

翌日、登校してきた隼総に声をかけたのは喜多。

喜多の顔を見た隼総はあからさまに嫌そうな顔をするも、すぐに視線をそらした。

「監督から聞いた。君も輝月さんのサポートのボランティアをやるんだってね」

「勝手に決められただけだ。やる気なんかねえよ」

「そうなのか？でも、隼総はクラス違うから滅多に手伝う機会がないだろうしな。じゃ、何かあったら伝えるまた放課後に」

喜多は伝える事を伝え終えたからか、早々に自分の教室へと向かっていった。

隼総もまた上履きをはいて教室に向かった。

隼総の教室は、喜多達の教室を通りすぎる事になる。
喜多の教室には姫華がいる。

隼総は姫華を苦手と皆に公言しており関わりたくないと言っていた。

“面倒くせえし、何よりうぜえ”

その言葉で聖夜に散々文句を言われたが聞き流した。

そのまま教室を通りすぎようとした時

「ねーねー、姫ぴよんて呼んでいい？」

教室から昨日聞いた声が聞こえ、隼総は視線を教室に向ける。

そこにいたのは昨日サッカー部にいた金髪で色付き眼鏡をかけた男子生徒、西野空宵一と姫華、喜多だった。

西野空とは昨日話してないが隼総は鬱陶しそうだと思っていた。
西野空は姫華の前の席に座り、頬杖をつきながらニコニコしていた。

「ぴょん？」

「そ。リボンがうさぎみたいだから姫ぴょん。可愛いあだ名でしょー？」

姫華のリボンは確かに西野空の言うようにうさぎの耳みたいになっていた。
ていた。

そこからぴょんがきたのだろうと隼総は思った。

「目見えないの知った時は驚きだけどさー、可愛いし一生懸命じゃ
ん姫ぴょんは。僕気に入っちゃったー」

「西野空、輝月さんが困ってるだろ」

「あ、大丈夫。大丈夫だよ、喜多くん。仲良くしてくれるの、嬉しいから」

「んふふー、仲良くしよーねー姫ぴょん」

嬉しそうな表情で姫華の顔を見ている西野空。
隼総はくだらないと考えて教室に向かった。

自分はシード。

だからマネージャーの目が見えない事など関係ないと考えていた。

時間が経ち、昼休み。

聖夜と同じクラスでこれまたサッカー部の安藤恒之とでお弁当を食べる事になったのだが聖夜が早々にいなくなってしまった。

「どこ行ったんだよあいつは」

「購買辺りに行ったんじゃないか？」

安藤の言葉を聞きながら隼総は自分と安藤の机を見る。

自分は朝コンビニで買ったパンとお惣菜。

安藤は弁当だった。

隼総がじつと見てるのに気づいた安藤が何か言おうとするが、聖夜が帰って来た事により遮られた。

「ごめんごめん。さ、早く食べよ」

「遅えよ輝月。…それ、弁当か？」

安藤は聖夜の手を持っている青い包みを見て尋ねる。
包みはお世辞にも綺麗とは言えない包み方で少しぐしゃぐしゃだった。

安藤の言葉に聖夜は嬉しそうな顔をする。

「うん、姫華ちゃんが作ったんだよー」

「ひめか…。あー、昨日のマネージャーか。お前の姉ちゃんだったな」

「目見えないのによく作れたな」

安藤が思いだしたように言う横で隼総は少し馬鹿にしたような言い方をした。

聖夜はそれを気にせず座り、包みを解き蓋を開けた。

中身は煮付けやしょうが焼きと言ったような手の込んだ料理がならんでいて安藤と隼総は目を見開いた。

まさか彼女がここまで料理が出来るとは思ってなかったからだ。

「これ本当にあいつが作ったのかよ」

「うん、お母さんが姫華ちゃんに小さい頃から料理教えこんでたからさ。大体の料理は作れるんだよ」

よかつたら食べてみる？と聖夜は二人に弁当を突き出す。

安藤は「じゃあ遠慮なく」と煮付けに手を出した。

聖夜の視線を感じた隼総はしぶしぶながら手前の卵焼きを指でつまみ口に放り込む。

「お。結構うまいな」

「だろー、姫華ちゃん料理うまいんだからな。隼総、どう？」

期待の眼差しで見つめてくる聖夜を見ながら、隼総は卵焼きを嚙んで飲み込む。

甘さが少し足りないがまずまずの味だった。

「普通」

「普通って何さー!!」

「甘くねえ」

「え。家の卵焼き甘めなんですけど」

「は」

「わー、隼総甘党ー!!」

「うっせ騒ぐな馬鹿！」

「お前等飯早く食べよ」

聖夜と隼総が騒ぎ出したのを見ながら安藤は弁当を食べ終えた。

昼休み終了まであと15分。

第4話 人気（前書き）

部活に向かう途中に、姫華にちょっとした事件が…

第4話 人気

「なんなんだよあの野郎…甘いもん好きで何が悪いんだよ」

放課後の廊下を、苛立ちながら歩いている隼総。

理由は昼休みに自分の味覚をからかわれた事から。

隼総は比較的甘いものが好きで味付けも甘いものを好んでいる。

それをからかわれる事に苛立っていた。

先程担任に資料運びを手伝わされた隼総は、部活に向かうべく歩いていった。

その時

「あ、あの……困ります。離してください……」

耳に入ってきたのは聞きなれた声で、隼総にとって苦手な部類の少女の声。

放っておこうかと思ったが後から誰かしらがうるさくなりそうなため、声がした方にむかう事にした。

声の主はやはり姫華で、複数の男子生徒に囲まれていた。

男子生徒達はブレザーの刺繍を見る限り2、3年だと判断した。

よく見れば一人の男子生徒が姫華の腕を掴み逃がさないようにしていた。

その様子を見ながらリーダー格であろう男子生徒は姫華に更に近寄った。

「だからあ、さっきから言ってるっしょ？俺達にちよつとだけ付き合わない？」

「あのっ……あの……私、部活……」

「いいじゃんいいじゃん、ちょっとだけだからさ」

どうやらナンパの類いらしいが、姫華は目が見えない。

見えない状況で自分よりずっと大きい何人も男に囲まれるのはかなり怖いものだろう。

現に姫華は泣きそうになっている。

隼総はため息を一つつくとその男子生徒達の方に近寄る。

「おい、輝月。部活始まるぞ」

「はや、ぶさ…くん…?」

「は？なんだよお前、1年はすっこんでろよ」

あからさまに嫌そうな顔をしている男子生徒を無視し、姫華の腕を掴んでる男子生徒の腕を掴み力をこめる。

「いつ…てえ…!？」

「ウチのマナージャーに迷惑かけんな。…行くぞ」

男子生徒が腕を離したのを確認し、反対の腕で姫華の手を掴むと隼
総は歩いて行く。

その時、男子生徒のベルトにつけられたチェーンに何かが引っ掛か
って落ちたが二人は気づかなかった。

リーダー格の男子生徒は二人が去った後落ちたものを拾いあげる。

「……………これ、使えるな」

拾いあげた物を見ながら男子生徒は口元を緩めた。

「まったく、それですつと絡まれてたんだぜ。嫌なら嫌って言えばい
いのによ」

「仕方ないさ、姫ちゃんは大人しい子だしそういう時の対処がわか
らないんだから」

部活に間に合った二人はすぐに準備を始めた。

隼総はストレッチをしながらペアになった紅色の長髪が特徴的な星降香宮夜に愚痴をこぼしていた。

星降はそれを聞くと苦笑しながら一生懸命仕事をしている姫華に視線を向ける。

星降は姫華や聖夜と同じ小学校出身で仲が良いと言う。

穏やかで人当たりがよく入部間もなく大抵の部員と会話をしている星降は隼総のよき相談相手でもあった。

ストレッチを終え、練習の準備をしている中星降は皆の輪から外れて姫華の方に向かった。

飽きないな、と隼総は星降を見ながら考えていた。
すると後ろからふいに重さがやってきた。

「何ター？やきもち？姫びょんと仲良しな星降に嫉妬？」

「何馬鹿な事言ってる、西野空」

犯人は西野空だったらしく隼総に後ろからおぶさるよつに乗っかっていた。

隼総はそんな西野空を見て怪訝な顔をして振り落とそうとする。

「やー！隼総、落ちる！落ちるー！」

「知るか、さつさと落ちろ！」

「暴力反対！この甘党」

「またテメエか輝月！！」

西野空の味方とでも言うように隼総をからかう聖夜に隼総が怒鳴りつけようとした瞬間。

「隼総、ちょっといいかな」

いつの間にか近くにあった星降が隼総を呼ぶ。
それを見て西野空は隼総から降り様子を見る。

「なんだよ」

「隼総、姫ちゃんと一緒に来たよね。姫ちゃん、なくしものしたらしいんだ。何か知らない？」

「なくしもの？何なくしたんだ」

「鍵につけてたキーホルダーだって。タオル地のうさぎで小学校の頃から姫ちゃんのお気に入りで入りだったんだ」

「うさぎ……。いや、見てねえ。どっかで落としてたら落とし物いれとかに入ってるんじゃないか？」

「そうだといいけど……。とりあえず、部活終わったら見てみるよ」

ありがとう、と隼総に礼を言つと星降は姫華のところに再び向かった。

「あれお守りなんだよね、見つければいいけど」

「誰かが持つてかねえ限り見つかるだろ。練習始まるぞ」

聖夜の言葉を流しながら隼総はフィールドに向かっていった。その後ろ姿を見ながら、聖夜は呟いた。

「気づけよ、鈍感……」

第5話 窮地（前書き）

暴力表現注意

第5話 窮地

翌日、隼総が登校すると星降が落とし物入れの前に立っていた。まだ探しているのだろうかと隼総は声をかけた。

「よ、星降。まだ探してるのか」

「おはよ、隼総。…うん。あれ、姫ちゃんがすごく大切にしてたから」

「なんであいつのためにそこまでやるんだ」

理解が出来ないという風に言う隼総に、星降は軽く髪をかきあげた後口をひらく。

「姫ちゃんにとって、そのキーホルダーは特別なものなんだよ。ずっと、大切にしていたものだから。…隼総には、そういうものないの?」

星降の問いに隼総は視線を下に向け考えこむ。

自分にとって大切なもの

いくら考えても答えは出て来ない。

それを察したのか星降は「無理して言わなくていいよ」と言い教室に向かった。

隼総も戻ろうとした時、話し声が聞こえた。

「荒川、それどうしたんだよカノジョの？」

「ばっか、昨日の可愛い1年生のウサギちゃんが落としてったんだよ」

「ウサギちゃんとか！でもそれどうすんだよ」

「決まってるだろ、ちょっと使わせてもらっただよ。ちょっと、な」

昨日の男子生徒達が騒ぎながら廊下を歩いて行った。

荒川というリーダー格の男子生徒の手には手のひらにおさまる白いウサギのキーホルダーがあった。

「…あいつ等が拾ってたのか」

後ろ姿を見ながら、隼総は眩き教室に戻って行った。

昼休みになり、隼総はすぐに教室を出て行った。
クラスメイトからの情報で荒川達は屋上によくいると聞いたからである。

行ってみると、案の定荒川達はいた。

それ以外に人はいない。

傍まで歩いて行くと、隼総に気付いたのか荒川がこちらを見る。

「昨日の1年か。何の用だ」

「輝月のキーホルダー、あんた等が持ってたんだろ。返せ」

「は？なんでお前に返さなきゃなんねーんだよ」

「返せつつってんだろ。あいつが困っ……!!？」

隼総が更に荒川に歩み寄ろうとした時、腹部に衝撃がはしる。近くにいた男子生徒が隼総の腹部を蹴りあげたのだ。

咄嗟の事に隼総は痛みに顔をしかめうずくまる。

「お前、先輩に対する礼儀がなあってねえな。それとも彼女か、あのウサギちゃんは？」

うずくまったままの隼総に近寄り髪を掴んで無理矢理顔を上げさせる荒川。

隼総は何も言えず、ただ荒川を睨み付けていた。

その様子が気に食わなかったのか荒川は周りにいる自分の仲間達に視線を向ける。

「生意気な後輩くんには、躰が必要だよな？」

「っ……ぐ……う……」

「ほらほら、さっきまでの威勢はどこ行ったんだ!？」

「確かこいつ、サッカーじゃシードとか言う実力者なんだよな」

「でも喧嘩はからっきしみたいだな」

「ははは、言えてる」

屋上に響く鈍い音。

荒川達は隼総を殴る蹴るの暴行をして倒れては立たせまた暴行を繰り返していた。

「少しは懲りたか？先輩に楯突くところなるんだ………よ！！！」

荒川は再び隼総を立たせ顔を思い切り殴る。

殴られた隼総は地面に倒れ何度目かわからない空を見た。

男子生徒達が隼総を再び立たせたその時

「隼総くん……ここに、いるの……？」

屋上の扉が控えめに開き、姫華が辺りをキョロキョロしながら現れた。

それを見た荒川が口元に笑みを浮かべた。
隼総は嫌な予感を感じ声をあげた。

「輝月、逃げっ……うあっ！！！」

「隼総くん？」

「おっと、逃がしはしないぜ」

隼総の言葉を遮るように男子生徒の一人が隼総を蹴りつけ、荒川は姫華の腕をとり引っ張って連れてきた。

「いたっ……痛い、ですっ……!!」

「隼総、だったか。残念だな、逃がせなくて」

膝をついて自分を見上げる隼総を見ながら荒川は連れてきた姫華を見せつけるように突き出す。

姫華は今の状況が理解出来ないようで不安そうに視線を泳がせる。目の見えない姫華には、意味のない行動だが。

「ところで、輝月ちゃんだっけか。これ、君の落とし物だよね」

荒川は姫華の様子を見た後姫華の手にキーホルダーを持たせる。

その感触に姫華は驚いたように荒川のいる方向を向く。

口元に笑みを浮かべたまま荒川は言葉を続ける。

「で、返してもいいけど俺と」

「隼総くんに、何したんですか」

荒川の言葉を遮るように姫華が言葉を発する。

その言葉に荒川だけでなく周りの男子生徒、隼総も驚いていた。

「何を言っ」

「私は、耳も鼻もいいです。さっきから隼総くんの苦しそうな息遣い、かすかに匂う血の匂い………いったい、何をしたんですか!？」

姫華の言葉に隼総はまじまじと姫華に視線を向けた。
目が見えない分他の感覚が鋭いのだと考えたその時

バシッ

乾いた音が屋上に響いた。

第6話 進展(前書き)

化身、出現

第6話 進展

「輝月!!」

乾いた音の正体は荒川が姫華の頬を叩いたからであった。
叩かれた姫華は地面に倒れこむ。

「目見えないからどうせ適当に言い訳考えれば済むと思ったが……
…随分と厄介だなこのガキ」

「……目見えないからって私に話しかけたんですか？」

荒川の言葉に姫華は起き上がりながら悲しそうな顔をする。
その様子を見ながら開き直ったように荒川は口を開く。

「はぁ？扱いやすそうだと思ったからに決まってるだろ？じゃなかったら誰がお前みたいなの女に声かけるんだよバァーカ」

「うっ……ひっ……うえええ……んっ……ふえええん……」

あからさまに姫華を罵倒した言葉。

姫華はその迫力と言葉に気圧され座りこんだまま泣き出してしまった。

泣き出した姫華を見て荒川は苛立つように声を荒げた。

「あー……うっぜえ！泣くんじゃねえよ、今度は殴るぞ！」

「……ひう……！？……ひっ……う……ふわああん！」

荒川という言葉に、姫華は更に声を上げて幼い子どもみたいに泣き出した。

その様子に、更に苛立った荒川は手を振り上げた。

しかしその腕は黙って見ていたはずの隼総により掴まれた。

「テムエ…まだ動けたのか」

「……に……」

「あ？」

「姫華に、手え出すんじゃないねえ」

先程とは違う、殺気のコもった瞳で睨み付ける隼総に荒川は一瞬恐怖を覚えるが近くににいる仲間には声をかける。

「こいつ、もう一度いたぶってやるっぜ！」

「シードがなんとか言ってたな…。特別に見せてやるよ、シードが持つ力をよ！！」

男子生徒達が隼総に殴りかかろうとした時、隼総の背後から気の塊が発生し男子生徒達を吹き飛ばした。

気の塊は徐々に姿を変え、白い翼で鋭い爪の生えた腕を持つ青い鳥人へと姿を変えた。

実力の高いサッカー選手が持つと言っ存在…化身。
隼総もシードと言っ実力者であるため化身を持っている。

その名は

「来い！！鳥人……ファルコ！！！」

「な、なんだこの化け物！？」

「こんなの相手に出来るかよ……」

ファルコを見た荒川と男子生徒達は怖じ気づき、恐怖の感情を露にしながら屋上を去って行った。

いなくなったのを見て化身をしまい、隼総は足元に落ちているキーホルダーを拾いあげ姫華の元へ向かう。

姫華はまだ泣いていて、化身の事には気づいていないようだった。

「姫華」

幾分か優しめの声で名前を呼ぶと、まだ涙が瞳から溢れてはいるが顔を上げた。

隼総は姫華の前に座り、姫華の手にキーホルダーを乗せる。

「あ…」

「もう、なくすなよ」

キーホルダーの感触に驚いたような声をあげる姫華の頭に、隼総は軽く手をおいた。

だが、そうしたのもつかの間。

化身を出すには体力を消耗する、ましてやボロボロの状態だ。姫華の声を最後に、隼総の意識はそこで途絶えた。

意識を取り戻した隼総が見たのは、白い天井だった。

どうやら病院のようで腕には点滴の管が刺さっていた。

「気がついたか」

声が聞こえた方に視線を向ければ、喜多が椅子に座っていた。

状況が飲み込めず目を瞬かせると喜多は説明をした。

「輝月さんが教室に帰って来ないから、探しに行ったら屋上で君が倒れてたんだ。…ひどい怪我で3日間安静に、らしい」

喜多の説明を聞き、点滴が刺さっている方とは反対の腕を見れば包帯が丁寧に巻かれておりかすかに薬品の匂いがした。

「…姫華は？」

「疲れたみたいで、今日は家に帰ってる。……隼総、今名前で…？」

喜多は隼総が姫華を名前で呼んでいる事に驚いたような顔をした。今まで名字で呼んでたのだから当然だろう。

喜多の様子に意味を理解した隼総は顔を喜多と反対側に向け、布団を握りしめる。

「気付いたら、呼んでた。…あいつが泣いたのを見たら、俺が助けねえとって……そんな気持ちになった」

「そんな気持ち、か…。どうしてなんだろうな、あれだけ輝月さんを苦手だと言っていたのに」

隼総の言葉に喜多は不思議そうに考えこむ。

他人の事なのに真面目に考える喜多がおかしく見え、隼総は思わず苦笑した。

その日、しばらく喜多は隼総と他愛ない会話をして帰って行った。

その日の夜、隼総は窓から見える星空を見ながら眠りについた。

第7話 記憶（前書き）

10年前のキャラがでてます。

第7話 記憶

『ふえええええええん…』

誰もいない公園で、一人の女の子が泣いていました。

そこに一人の男の子が女の子に近寄っていきました。

『どっして泣いてるの？』

男の子の質問に、女の子は泣きながらも答えました。

『帽子が……帽子がなくなっちゃったの』

そう言って女の子はまた泣き出してしまいます。

男の子は困った様子で辺りを見渡しました。
すると、木の枝に可愛い麦わら帽子が引っ掛かっているのが見えまし
た。

きつと、女の子の帽子なんだと思った男の子は木に登って麦わら帽子を取りに行きました。

麦わら帽子を取って、女の子に被せてあげると女の子は驚いたように泣くのを止めました。

『もう、なくしちゃ駄目だよ』

男の子がそう言うと女の子は嬉しそうに頷きました。

「……………夢、か」

窓から差し込む太陽の眩しさに、隼総は目を開けた。

なんだか懐かしいような夢を見ていた気がするが自分にそんな記憶はない。

夢の話だと思い隼総は起き上がった。

「隼総くん、今日の調子はどう？」

朝ご飯が終わった後、隼総の病室に一人の看護師がやって来た。

ラベンダー色の髪を後ろにまとめ、優しそうな顔立ちをした看護師の名前は久遠冬花。

この病院に勤めている看護師で優しい性格から患者達に好かれている。

隼総の担当でもある彼女は昨日からよく隼総の様子を見に来ていた。

椅子に座りながら自分を見る冬花に、隼総は簡単に受け答えをする。

「昨日よりはマシになった…」

「そっか、でもあと2日安静にしなきゃ駄目だよ」

隼総の言葉に安心したように口元を緩める冬花。
しばらく沈黙が続き、再び冬花が口を開く。

「そういえばね、私の旦那さん元サッカー部なんだよ。隼総くんもサッカーしてたよね」

「へえ……。まあ、一応は」

「ポジションはMFだったの、隼総くんは？」

「……MF」

「すごい、偶然だね」

返答を聞きながら冬花は嬉しそうに次々と質問をしていく。

隼総はやや面倒くさそうにしていたものの、質問には全て答えていた。

「今私の旦那さんね、跡取りだから地方の実家にいるの。私はここで働きたかったからマンション借りて住んでるんだ」

「…別居？」

「やだ、違うよ。ちゃんと休暇とか非番の日は帰ってるもの。子ども達もいるから寂しい思いさせたくないし」

子ども

その言葉を聞いて隼総がふいに視線を反らす。突然の事に冬花は不思議そうに首を傾げる。

「どうしたの？」

「あんたも親なのか…」

「うん、3歳の息子と1歳の娘がいるよ」

「……………」

「隼総くん？」

黙りこんでしまった隼総を心配そうに見つめる冬花。
しばらく黙っていたかと思えば、隼総は冬花をじっと見据える。

「…子ども、絶対捨てんなよ」

「？捨てないよ、だって私の子どもだもん」

「……………なら、いい」

答えに納得したのか、布団をかぶり冬花と反対方向に体を向けた。

少しして「また後で来るね」と布団越しに冬花の音が聞こえ扉がしまる音がした。

その音を聞いて、隼総はゆっくりと起き上がりシーツを握りしめた。

「じゃあなんで、あいつ等は……俺を捨てたんだよ」

隼総は厳格で寡黙な父と、おっとりしていてやや病気がちな母の間に生まれた。

兄弟には9つ年の離れた姉がいて、末っ子の隼総は可愛がられて育った。

隼総はサッカーが好きだった。

きっかけは当時姉が応援していたイナズマジャパンの試合と一緒に見ていたからだ。

テレビで見る選手達は皆かっこよく、隼総もいつかそんな選手になる事を夢見ていた。

来る日も来る日も毎日練習をして、気づけば隼総は8歳でジュニアチームのレギュラーとなっていた。

そして、レギュラーとして初めての試合に出場した。

しかしそこで事件は起きた。

相手チームはジュニアチームながらもラフプレーを扱うチームとして有名で何人ものチームメイトが負傷した。応援に来ていた姉が注意をすると、相手チームの選手はあろう事か姉にボールをぶつけたのだ。

その時、隼総は怒りに任せて化身を出現させた。

これが隼総とファルコの出会いだった。

試合は無効となり、隼総は相手チームはもちろんチームメイトからも恐れられた。

「チームに化け物がいる」

当時化身の存在はほとんど知られてはおらず化身使いは化け物呼ばわりされていた。

それは隼総の父も例外ではなく父から避けられるようになった。

母や姉は庇ってくれていたが、父は一向に隼総と距離を縮める事はなく当時まだ管理組織になっていなかったフィフスセクターに隼総を引き取らせた。

当時のフィフスセクターは化身を扱う子どもを集めていたため、化身を使ったという隼総の話聞き現れたのだった。

それ以来、隼総はフィフスセクターが支給した施設に住み家族の行方は知らない。

そんな嫌な過去をこれ以上思い出さないよう、隼総は再び眠りについた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7214v/>

巢無き隼と光無き少女

2011年10月5日20時42分発行